Z01c 「天文月報」論説にみる日本の天文学普及動向Ⅰ

株本訓久（武庫川女子大学）、有本淳一（大阪教育大学）

昨今、天文学教育・普及についての関心がかつてない高まりを見せている。それは天文教育普及研究会による活動、あるいは天文学会自体の取り組みに顕著に反映されていると考えられる。このような天文学教育・普及に関して、その歴史的変遷や、さらには科学史的観点からの研究は今後の教育・普及を考える上で非常に重要である。また、純粋に天文学史という立場から考えても日本の天文学社会が果たしてきた役割やその発展に関して重要なテーマである。
我々はこのような天文学普及の動向を知るために「天文月報」に掲載された論説について、分野別に分類し、その動向について検討した。
「天文月報」は、天文学会初代会長寺尾寿の「発刊の辞」にあるように、天文学普及に重点を置いていた。また、「天文月報」は、後に天文同好会（現東亜天文学会）によって発行される機関誌「天界」とともに、天文学会の機関誌として、天文学普及の中心的な役割を果たしてきた。従って、「天文月報」に掲載された論説は、当時の天文学普及の動向を示していると、言える。
今回は、1908 年の創刊から 1945 年までの 38 年間についての調査を報告し、年代による変化や分野の変化、さらに日本の天文学社会の中心的な話題との関わりなどについて議論したいと考える。